

染香 ぜんこう

福泉寺寺報
令和6年5月
第124号
毎月1日発行

さようなら

ある葬儀でのこと。火葬場で50代くらいの女性が棺にしがみついて嗚咽していました。家族に促されるように引き離されたときに、女性は「お母さんさようならー」と声を上げました。

数年前の出来事ですが、鮮明に覚えています。なぜなら、このような場面で最も使いたくない言葉を大声で言ったのですから。

帰宅してすぐに調べました。「さようなら」は「左様なら」と書くのですね。「左様」とは、「そういうこと」という意味です。これに「ならば」と付け加えるのです。

意識をするなら「現実とはいえ到底受け入れられないが、仕方がない、そういうことなら」と読めます。

単純に別れの言葉だった「さようなら」が、私の中で大きく意味を変えてきました。

こんな話を、あるご門徒さんにお話ししたのか、こちらの記憶は曖昧です。

このご門徒さんは大病を患って、いのちの期限が定められていました。しかし、憧れの石原裕次郎の「我が人生に悔いなし」のごとく、思い切り駆け抜けた人生だったのは自他ともに認めるところだったようです。

ホームページ



お寺LINE



子ども行事



桜のつぼみの頃に、門徒さんはお浄土へ迎えられました。

通夜の席で、私は「さようなら」の話をしました。続いて甥御さんが挨拶をされました。ご本人が書き残した挨拶状を代読されました。自分の通夜に自分の言葉で挨拶ができること自体、素晴らしいことだと思います。胸が少し熱くなりながら聞いていますと、最後の挨拶がなんと「それでは皆様、さようなら」だったのです。これにはご当家も私も驚きました。

「さようなら」は「左様なら」、言い換えれば、現実とは言え到底受け入れられないが、仕方がない、そういうことなら…:」という意味でした。最後の「…」は、残された者がこれからどのように生きていくか、その内容を入れてください、と、通夜の話で申し加えました。

大正生まれの歌人・中条文子氏の歌に
遺産なき母が唯一のものとして残しゆく
『死』を子らは受取れ
とありました。併せて味わってみてください。



タンナミソウ

(住職)

報恩講を身近なものに3

【御齋(おとき)】

仏教では『食事(じきじ)』と呼ばれる、午前10時から正午までの間に食事をする習わしがあり、このときの料理を『齋(とき)』といいますが、このときの料理を『齋(とき)』といっています。報恩講の御齋では、門徒さんが米や野菜、味噌などを持ち寄り調理してくださいいます。古来より、食事をいただきながら宗祖親鸞聖人の遺徳をしのびつつ、お念仏に出遇った喜びを語り合いました。

シイタケ(旅に使用した傘)ゴボウ(流罪の折に使用した杖)人参(寒さによるあかぎれ)里芋(石を枕にされた)など、食材にも工夫を凝らすお寺もあります。

ちょっと あたまの こりほぐし

クラスメイトのたかし君とじん君は、運動会の日も、遠足の日も、音楽会の日もたまたま同じお弁当でした。さて、それはどんなお弁当だった？

★ヒント：2人のお弁当の中身は、3回とも一致していました

答えは裏面です



おてらより

念仏車仕団、行ってきました

西本願寺の伝統イベント。

毎年実施していますので、次回はぜひ一緒に過ごしてくださいー！

(児童念仏車仕団)



というのもあります

西本願寺専用ページ

「法事での会食をお寺で…」

「コロナ禍を過ぎて、」法事の会食が復活してきています。なるべく移動を抑えて会館での会食が増えてきました。皆様に建てていただいた会館が喜んでいるように感じられます。よろしければ是非！

境内の無縁墓を、整理します

いよいよ今年も境内の無縁墓を整理します。段取りは①無縁墓撤去②参道・通路の確保③聖地の線引き④お申し込みの順にご案内。少しでも皆様のお参りの環境を良くしたいと考えています。

告別式（あいさつ文）

井上順市

本日は公私ともお忙しい中、大勢の皆様にご会葬賜りまして誠に有難く、こころより御礼申し上げます。

私こと井上順市は一九四五年、昭和二十年の終戦の年にこの岩成の地に生を受けました。当時の日本は、貧しゅうございました。

加えて、我が家は農家です。現金収入がありません。

かぐやの「神田川」や「あかちようちん」の曲のような貧しい少年・青春時代を過ごしてまいりました。

今でもこの曲が流れますと、涙が出てまいります。そして、日本が高度成長期にはいりますと、朝早くから夜遅くまで、当時流行語となった猛烈社員のごとくよく働き、ま

たよく遊びました。おかげさまで充実した現役時代を過ごすことができました。以来四分の三世紀の間、皆様方に助けられながらやってまいりましたが、なに一つ恩返しもできず先にいくのは誠に申し訳なく、残念な気持ちで一杯です。人はよく「我が人生に悔いなし」とよく口にします。

また、友子もよく「あなたは好き勝手なことばかりしてなにも思い残すことはないでしょう」と申しておりますが、私は恥の多い生涯を送ってまいりました。悔いばかりが残っております。

全て中途半端なまま去るのは誠に残念ではありますが、これから先は皆様方にお任せするほかありません。

最後になります。今日までわた

しを支えてくれました友子が年々年老いていくのを見るのはつらいものがあります。

どうか皆様、生前私が賜りましたご厚情の数々、引き続き残される友子に賜ります様、切にお願い申し上げます。御礼とお別れのご挨拶とします。本当にありがとうございます。そして皆様 さようなら。



【ご挨拶に添えて】

この「あいさつ文」は元気な時に支度したものではありません。ご自身が医師から「命の期限」を告げられ、書くこと、読むこと、しゃべることがままならなくなってきたときに準備されたものだそうです。奥様に許可をいただき、皆さまにもおすすそ分け。

病気が分かってから、私と坊守で一度自宅を訪ねました。ビデオレクターの制作の話を持ち掛けたりして、「先の話」のできる方でした。

この文章から、自身が病氣におかされていく不安が、残される奥様や家族への思いでまぎれるような状況が想像されます。そう、「先の話」とは、自分がいなくなった後も、家族が生き続けていく世界であり、自分の状態を後回しにしても、大切な人を感じる心が、この家族をいつまでも守り続ける、というものです。

思い続けてくれる人に出会えることは、お金や健康を超えて伴せなことです。（住）